The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	秦簡牘の全容に迫る : 陳偉主編『秦簡牘合集』
Author(s)	湯浅, 邦弘; 草野, 友子
Citation	中国研究集刊. 2015, 61, p. 100-108
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58730
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　夜号（総六十一号）平成二十七年十二月　一〇〇―一〇八頁

秦簡牘の全容に迫る

――陳偉主編『秦簡牘合集』

湯浅邦弘
草野友子

一、『秦簡牘合集』の刊行

清華大学竹簡や北京大学竹簡の公開により、出土資料研究の中心が首都北京に移りつつあるのではないかとも思われていた矢先、いややはり湖北の地こそ出土簡牘研究の拠点であると誇示しているかのような大冊が、先頃刊行された。武漢大学の陳偉教授を主編とする『秦簡牘合集』全四巻六冊（全二六五三頁、武漢大学出版社、二〇一四年十二月）である。

この書は、中国教育部哲学社会科学研究重大課題攻関項目「秦簡牘的総合整理与研究」による研究成果であり、戦国時代後期から秦代に至る七つの秦簡牘を取り上げている。各冊の内訳は、次の通りである。

・第一巻　睡虎地秦墓簡牘（上中下三冊）　武漢大学簡帛研究中心、湖北省博物館、湖北省文物考古研究所編

・第二巻　龍崗秦墓簡牘・郝家坪秦墓木牘　武漢大学簡帛研究中心、湖北省文物考古研究所、四川省文物考古研究所編

・第三巻　周家台秦墓簡牘・岳山秦墓木牘　武漢大学簡帛研究中心、荊州博物館編

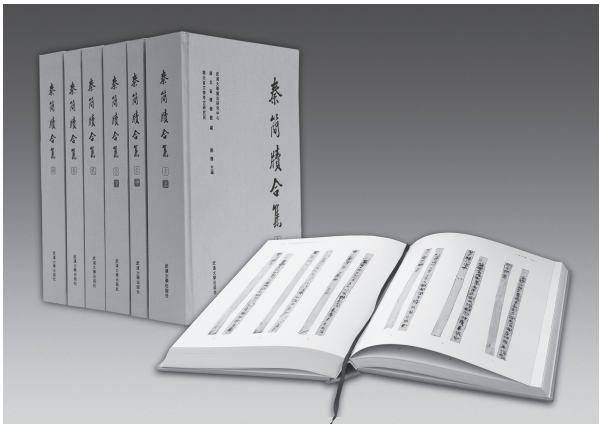
・第四巻　放馬灘秦墓簡牘　武漢大学簡帛研究中心、甘

肅簡牘博物館編

この内、三冊からなる睡虎地秦墓簡牘について補足しておくと、内容は、その大半を占める「睡虎地十一号秦墓竹簡」、および「睡虎地四号秦墓木牘」からなる。上冊に概説と釈文・注釈、中冊に原寸大モノクロ写真、下冊に二倍に拡大したモノクロ写真が掲載されている。この睡虎地秦墓竹簡が発見されたのは、一九七五年であった。七二年に発見された銀雀山漢墓竹簡、翌七三年に発見された馬王堆漢墓帛書とともに、学界に大きな衝撃を与えた新出土資料である。

では、今回刊行されたこの『合集』にはどのような研究上の意義が認められるであろうか。

まずは、言うまでもなく、秦簡牘を集大成したという点である。これまで、戦国時代の後半から秦代に至る秦簡牘を研究しようとする場合には、それぞれの図版、釈文、研究書などを収集し、個別に検討する以外になかった。しかしこの『合集』では、全六冊にそれらが集成され、きわめて利便性が高くなっている。陳偉氏には、過去にも、『楚地出土戦国簡冊［十四種］』（経済科学出版社、二〇〇九年）の刊行があり、それは楚地から出土した戦国簡冊を集大成するものであった。そうした「集成」のコンセプトがこの『合集』にも共通しているのであるが、本書の方が遙かにその規模が大きい。そして、『楚地出土戦国簡冊［十四種］』との決定的な違いは、各資料に、それぞれ鮮明な写真が掲載されているという点である（但し、その後、竹簡図版入りのシリーズ『楚地出土戦国簡冊合集』が現在刊行中である）。これにより、



釈文と写真を容易に比較することができる。しかも、写真は二種類あって、原寸大写真では、その全体を俯瞰することができ、拡大写真では、その細部を検討することができるのである。ともかく、この『合集』は秦簡牘の全容を余すところなく提供している。この点が第一の特色である。

第二は、この『合集』の編集に、第一級の専門家と若手研究者が総動員されているという点である。試みに、各冊の担当者を以下に列挙してみよう。

・第一巻　睡虎地十一号秦墓竹簡……彭浩、劉楽賢、万全文、晏昌貴、伊強
　睡虎地四号秦墓木牘……陳偉、万全文
・第二巻　龍崗秦墓簡牘……李天虹、曹方向、蔡丹
　郝家坪秦墓木牘……陳偉、高大倫
・第三巻　周家台秦墓簡牘……劉国勝、彭錦華
　岳山秦墓木牘……劉国勝
・第四巻　放馬灘秦墓簡牘……孫占宇、晏昌貴

このように、メンバーは、出土資料研究の精鋭で構成されており、内容も、期待に違わず高い水準にある。また、こうした多数の研究者を統括した陳偉氏の手腕も高く評価される。

第三は、それに関連して、釈文、注釈、写真版の精度が高いという点である。例えば、睡虎地十一号秦墓竹簡（当初は「雲夢秦簡」と呼ばれていた）については、一九七八年に刊行された『睡虎地秦墓竹簡』（睡虎地秦墓竹簡整理小組編、文物出版社）が研究の基礎的資料であったが、それは、横組み簡体字で、掲載写真もわずかに二枚というものであった。その後、一九九〇年に同じく文物出版社から大型の図版として、同名の『睡虎地秦墓竹簡』が刊行され、釈文と注釈は縦組み繁体字に改められ、かつ全簡の写真が掲載されたが、その写真はきわめて判読しづらい不鮮明なものであった。

しかし、今回刊行された『合集』は、横組みという点では少し日本の読者には違和感もあろうが、公開以降の研究成果を充分に盛り込んで、釈文を作り直し、また詳細な注釈を加えている。その背景の一つとして見逃せないのは、赤外線撮影による鮮明な画像の提供である。当初、黒々としか見えなかった竹簡も、この『合集』では鮮明に文字が判読できる。こうした技術革新もあって、釈文・注釈の精度が格段に高くなっていると評価できるのである。今回新たに釈読を改めた文字は数百字に上り、竹簡の綴合・編連・分篇についても、約百箇所につ

いて再調整を行ったという。

出土資料は、研究を前進させる起爆剤である。しかし、資料を個別に見ているだけでは、なかなかその真価を把握できない。本書を活用して秦簡牘を横断し、さらには、近年出土・公開が続いている戦国簡、漢簡などとの比較も行えば、中国古代研究は飛躍的に前進するであろう。この『合集』は、そうした研究の一大画期をもたらすに違いない。

（湯浅邦弘）

二、本書の構成と再整理の成果

以下、本書の構成と再整理の成果について紹介していきたい。

まず、本書収録の簡牘の概要を確認しておこう。便宜上、出土年代ごとに概説する。

【睡虎地秦墓簡牘】（第一巻収録）

一九七五年、湖北省雲夢県の睡虎地十一号墓において竹簡が発見された。総数は約一一五〇枚で、その他にいくつかの残片がある。当初、「雲夢秦簡」と称されていたが、後に同じ雲夢県の龍崗からも竹簡が出土したため、「睡虎地」と区別されるようになった。墓主は、前二一七年に死亡した「喜」という人物であり、治獄（法律案件の審理）にたずさわった人物とされる。内容は、律令の条文を記した『秦律十八種』『效律』『秦律雑抄』、律令の解釈と治獄の規定を記した『法律答問』『封診式』、官吏に対する訓誡を記した『語書』『為吏之道』、擇日（吉日を選ぶこと）を主とする数術文献「日書」（甲種・乙種）、および秦の重大事件と墓主の経歴を記した『編年記』の十種に分類される。『日書』と『編年記』以外はすべて秦の法律に関係する資料であり、「喜」が職務を遂行する上で参照していた法律マニュアルであったと推測されている。

また、十一号墓と隣接する四号墓から木牘二件（十一号牘・六号牘）が出土している。この木牘は出征する士卒が家族に書いた書信であり、当時の家族構成や軍事制度・軍事形勢などを窺い知ることができる資料である。十一号牘は秦始皇二十四年（前二二三年）に、六号牘は同年三月以後、夏季に入る前に書かれたものであると推定されている。

【郝家坪秦墓木牘】（第二巻収録）

一九八〇年、四川省青川県の郝家坪五十号秦墓から木

牘二件（十六号木牘・十七号木牘）が出土した。十六号牘の正面には『田律』の条文が書写され、その背面と十七号牘は道路修繕の記録であり、『田律』中の道路修繕および維持・保護の規定と関係があると考えられている。『田律』の冒頭には「二年十一月己酉朔朔日、王命丞相戊（茂）」とあり、その背面の冒頭には「四年十二月不除道者」とある。整理者は「戊」は甘茂（秦武王期の左丞相）、二年は秦武王二年（前三〇九年）、四年は秦武王四年（前三〇七年）と見なしており、この解釈によると、現在見ることができる秦簡牘の中で最も早い時期のものであると考えられる。

【放馬灘秦墓簡牘】（第四巻収録）

一九八六年、甘粛省天水市の放馬灘一号秦墓から竹簡約四六〇枚と、木牘四件が出土した。竹簡の内容は主に日書（甲種・乙種）であり、その他の六枚の竹簡は「丹」と呼ばれる人物の死と蘇生に関する故事である。この故事は公開当初は『志怪故事』と仮称され、現在では『丹』と改称されている。竹簡の書写年代については、学界で意見が分かれており、戦国中期頃から秦の統一前とする説や、秦の統一以後とする説などが提示されている。また、四件の木牘には地図が描かれており、現在見ることができる最も早い時期の地図の実物である。

【岳山秦墓木牘】（第三巻収録）

一九八六年、湖北省江陵県の岳山三十六号秦墓から木牘二件が出土した。その内容は日書である。整理者は、該墓の陶器の風格、および睡虎地十一号墓と接近していることから、年代は秦統一の初めの頃と見なしている。この日書の内容は、睡虎地秦簡の日書と最も近いとされている。

【龍崗秦墓簡牘】（第二巻収録）

一九八九年、睡虎地秦墓竹簡と同じ雲夢県城関の龍崗六号墓から竹簡二九〇枚余りと木牘一件が出土した。竹簡は律令の条文であり、木牘は司法文書に属するものである。整理者は副葬品の陶器から判断して、この墓は秦代に属し、年代の下限は前漢には至らないと見なしている。整理者はまた、簡牘の書写年代の上限はおそらく秦統一の年よりやや遅れると推測している。

【周家台秦墓簡牘】（第三巻収録）

一九九三年、荊州市沙市区の周家台三十号秦墓から竹簡三八一枚と木牘一件が出土した。内容は、日書・病

方・始皇三十四年質日・三十六年日・三十六年置居と二世元年日である。整理者は、該墓は睡虎地十一号秦墓よりやや遅れると見なし、下葬年代を秦代と推定している。その一方で、副葬品の風格と結びつけて見ると、年代の下限はさらに下り、前漢初年に至る可能性も排除できないという見解も提示されている。

以上が本書に収録されている秦簡牘の概要である。次に、本書の構成とそれぞれの項目の詳細について解説していきたい。

本書は、概述、釈文・注釈、主要参考文献、簡牘の写真図版で構成されており、必要に応じて簡号対照表や綴合調整一覧が附されている。

まず、各簡牘の冒頭の概述において、発見の経緯や整理と資料公開の状況などの概要を紹介している。

釈文・注釈の部分は、はじめに文献の基礎情報や竹簡の排列案などを掲載している。釈文は、基本的に内容によって篇が分けられている。簡牘自体にもともと篇名があるものはその篇名を使用し、篇名がないものは整理者あるいは研究者によって仮称された篇名を用いている。もともと篇名が付けられていないものや仮称の篇名を使用すべきではないと判断された場合は、文意によって仮称されている。基本的には、文献公開当時の簡牘の編号と順序をそのまま用いている。編連と綴合について意見がある場合は注釈の中で説明しているが、編連・綴合が妥当ではないと判断された場合には、適宜変更が加えられている（但し、編号は変更されていない）。

釈文は通行字を使用し、簡文の字形に照らして厳密に隷定されているわけではない。内容が近い簡文については、釈文を続けて記載している。分段・分章の際には改行し、明らかに連続しないものと、連続が確定できない簡文については、一行を空けて記載している。釈文の中で、簡牘の番号を示す部分にはアラビア数字を用い、網掛けが加えられている。分欄（段組）は壹、貳、参などを用いて表示し、木牘に数行の文が書写されている場合はⅠ、Ⅱ、Ⅲなどを用いて表示している。綴合されている竹簡で分析が必要なものについては、編号の後ろにA、B、Cなどを附している。

異体字・仮借字を通行字にしている場合は（　）内に、誤字を正確な文字に改めている場合は〈　〉内に、残っている筆画や文意によって文字が確定できる場合は【　】内に、文意や他の文献によって欠文を補える場合は『　』内に記載している。筆画が不鮮明な字や欠失している字は□を用いて表示し、一つの「□」が一文字に

対応している。文字数が確定できない場合は「……」と表示し、竹簡が断裂している場合は「〼」と表示している。脱字・衍字については、釈文ではそのまま掲載し、注釈の中で説明している。もともとすでに削られている字は「〇」と表示している。簡牘中、分篇・分章・分条を提示する墨点などはそのまま掲載し、合文・重文符合がある場合は該当する文字を直接記載している。

注釈では、最初に整理者の釈文・注釈を引用している。その際には「原釈文」「原注釈」あるいは「整理者」「再整理者」と述べ、作者・版本・ページ数などは省略している。整理者に対して意見がないときには直接記載するのみで、意見があるときには「今按」を加えて説明している。注釈の引用は、論点と主要な根拠を選び、簡潔に記載している。先行研究を引用する際、明確な書き誤りや照合が精密ではないものは、誤りを改めている。文献の引用や分析の際には、ページ数は表記していない。

主要参考文献は、各文献の後ろに略称を附し、本書の中で引用するときにはその略称を用いている。

図版は、原寸大写真と拡大写真の二種類があり、適宜、赤外線画像が加えられている。原寸大写真は最も早くに撮影されたものを中心とし、できるだけ出土時の状況を反映させている。拡大写真は原寸大写真の二倍の大きさであり、通常の図版あるいは赤外線画像の中で最も良いものが選択されている。図版の編号は釈文と対応し、赤外線画像の編号の下には、通常の図版と区別するために波線が加えられている。なお、写真図版は基本的にモノクロであるが、カラー図版を掲載している箇所もいくつか見られる。

それでは、以下、本書の成果を五つの観点から紹介していきたい。その際、睡虎地秦簡の用例を適宜引用して解説する。

第一は、再整理中に見つかったもの、未発表の図版、疑義のある簡牘画像を新たに検討している点である。例えば、睡虎地秦簡『秦律十八種』倉律の簡31「不備」の二字の残片は、一九八一年出版の『雲夢睡虎地秦墓』（文物出版社）にかつて掲載されていたが、一九七七年出版の『睡虎地秦墓竹簡』線装本（文物出版社）と一九九〇年出版の『睡虎地秦墓竹簡』精装本（文物出版社）では掲載箇所が誤っていた。しかし、今回の再整理中に左右がまだ断裂していない頃の画像が見つかり、下段と並び合わせることが可能となった。

第二は、通常の図版や赤外線画像によって、これまで未釈あるいは釈文が脱していた字を新たに釈読している点である。例えば、睡虎地秦簡『法律答問』簡42の「一

十」、簡109の「有辜」、日書甲種簡8貳の「毋」、簡107背面の「凡」などがそれに当たる。また、旧釈では未確定であったものについても新たな釈文を提示しており、睡虎地秦簡『法律答問』簡101「盗」（原釈「有」）、日書甲種110貳「金」（原釈「貨」）、簡141伍「恿（勇）」（原釈「要」）などがその例である。

第三は、重文・合文の認定と釈読についてである。本書では、これまで重文・合文符合が認識されていなかった箇所、重文・合文符合が誤って文字と認識されていた箇所、墨点が誤って重文符合と認識されていた箇所、重文符合の釈読の誤りなどについて適宜訂正が加えられている。例えば、睡虎地秦簡『法律答問』簡105の「告」字、日書甲種簡121背面の「衣」字の下などは、原釈文ではみな重文符合が抜けており、本書では一つ一つ補って記載している。また、睡虎地秦簡日書甲種の簡48背面壹、簡25背面貳、簡34背面貳、簡35背面参などの「僞二」は、整理者は二字の合文として「僞爲」と釈読しているが、先秦・秦漢の伝世文献に多く見られる「化爲」の用例を根拠に、「化爲」と釈読する説を提示している。

第四は、字義と解読の方面でも多くの成果があった点である。例えば、睡虎地秦簡『秦律十八種』廄苑律の簡18「縣診而雜買（賣）其肉」の「雜」は、原注では「猶俱也」と述べているが、里耶秦簡に見える祭礼に供える品の販売記録と対照させると、二人の人物が共に購入したことを指していることが判明した。また、『法律答問』簡156「大夫寡」は、原注では「寡」を「少」の意味で読んでいるが、里耶秦簡などの資料によると、「大夫寡」は大夫の死後に残された未亡人を指していることが明らかとなった。

第五は、綴合と編連を調整している点である。本書では、綴合・編連に疑問がある箇所について、文字の復原や他の資料との比較を行うことにより、新たな綴合・編連を提示している。例えば、睡虎地秦簡日書乙種『良日』簡73の綴合は誤っていることが判明し、上・下段（簡73A・簡73B）に分解して、それぞれ簡75・簡78と綴合している。さらに、簡78＋簡73Bを簡68の前に移動させたところ、改訂後の文は岳山秦墓木牘の日書『七畜日』とほぼ同じになった。

以上に紹介した例はほんの一部であり、全巻に渡って膨大な量の修訂や新見解が提示されている。今後、秦簡牘を研究する際には、まずはじめに本書を読むことが推奨される。

最後に、近年発見された資料についても触れておこう。本書に収録されている秦簡牘は、一九七〇年代から

一九九〇年代に発見されたもののみであるが、その後、二〇〇一年に里耶秦簡（湖南省文物考古研究所所蔵）、二〇〇七年に岳麓書院蔵秦簡（湖南大学岳麓書院所蔵）、二〇一〇年に北京大学蔵秦簡牘など、新資料が陸続と発見されている。これらは現在、整理と研究が進められている段階であり、全文献の公開はいまだ完了していない。本書の序言には、「今後、条件が備われば、『秦簡牘合集』第二輯を整理・出版したい」という一文があり、これら新資料の再整理も視野に入れていることが窺える。

周知の通り、秦代はその歴史的背景から伝世文献が乏しく、研究が難しいと認識されてきた。しかし、秦簡牘が大量に発見されたことにより、現在では秦代の研究が隆盛を極めている。秦簡牘の研究成果を集大成した『秦簡牘合集』は、秦代の歴史や文化を研究する上で必読の書となることは疑いないであろう。

【補足】なお、中国において本書を紹介している記事は以下の通りである。

・胡平生「秦簡合集　同道相益」（『人民日報』二〇一五年七月二十八日二十四版）

・王子今「更深入的研究――評陳偉主編《秦簡牘合集》」（『光明日報』二〇一五年八月三日十六版）

・侯旭東「秦簡整理的新里程碑」（『中華読書報』二〇一五年八月十二日十版）

・張春海「秦簡牘綜合整理与研究取得進展４巻６冊《秦簡牘合集》面世」（中国社会科学網、二〇一五年九月十日）

（草野友子）